

学生の思考と言語化する力を育む教育実践
－ LMS の活用とオンデマンド・対面授業併用の効果－

大森優
神田外語大学

Fostering Students' Thinking and Verbalization Skills by Utilizing
LMS and the Combination of On-Demand and Face-to-Face Classes

Yu Omori
Kanda University of International Studies

1. はじめに

多様な他者との協働、理解がますます求められるこれからの社会において、自分で思考し、そして自分で考えたことや感じたことを自分の言葉で表現できる力を持つことが、より一層重要になる。学生の「思考」そして「言語化する」力をいかに育ていけるか。それが大学の教養教育に課された大きな役割である。

大学のユニバーサル化により、初年次教育の一環として、アカデミック・スキルや日本語での文章表現を扱う科目を設置する大学が増えている。神田外語大学外国語学部においても、大学で学び、研究していくための基礎を身につけることを目的とした「基礎演習」が1年次の必修科目として設置されている。「基礎演習」では、自ら問いを立て、調べ、他者の意見も踏まえながら、自分の考えを説得的に伝えていく力をつけるため、テーマの探し方、文献・情報の検索の仕方、テキストの読み方、データの処理法、プレゼンテーションの方法、レポート・論文作成の方法などの基礎を実践的に学ぶ（シラバスより）。複数の教員が担当しているため、それぞれの専門や経験を活かしながら、この共通シラバスの下、それぞれの方法で授業を展開している。

考え、自分を振り返り、言語化する力は実践する中で徐々に育まれるものであり、そのためには多くの「仕掛け」と積み重ねが必要である。筆者は2019年度から「基礎演習」を担当し、書くことを通して、学生の思考力を深め、自分で発見する楽しさを感じてもらえるような教育実践の試行錯誤を重ねてきた。新型コロナウイルスの影響を受け、2020年度は完全オンライン化、2021年度前期は対面とオンラインを併用して実施されることとなり、筆者が担当するクラスでも学習管理システム（以下、LMS）の一つである Google クラクルームを使用しながら、新たな授業の形を模索してきた。結果として、学生の思考の深まりや言語化する力が授業を通して大きく向上しているという感触が得られ、学生の「振り返り」からは、学生自身も成長を実感していることがわかった。授業の中の「仕掛け」が、LMS やオンデマンド授業を活用することでさらに有効に働き、対面授業とも組み合わせることで、これまでの授業形態では得られなかった学習効果があげられたのではないかと考えられる。

そこで本稿では、筆者の2021年度前期の教育実践を振り返り、LMS やオンデマンド・対面授業を併用した「基礎演習」の受講を通して、学生の思考や言語化する力、学びに対する姿勢がどのように涵養されたのかを明らかにする。授業設計の意図と履修者自身の語りという2つを詳細に見ることで、授業内でどのような「仕掛け」がなされ、そこでの経験が履修者の思考力や言語化する力にどのような影響を与えていたのかを探り、今後の新たな授業や学習の形を考える手がかりとしたい。

まず2章で本実践の設計意図を説明する。そして3章では履修学生の「振り返り」から、本実践を通して身につけた思考や言語化する力を含め、学びに対する姿勢がどのようなものであったかを分析する。4章で、そうした学びに、LMS や対面とオンデマンド授業の併用がどのように作用していたのかを考察する。

2. 授業設計

2. 1 本実践の3つの柱

レポート作成を通して、思考を深め、それを自分の言葉で表現できる力をつける。それが本実践の目的である。これは井下（2008）の大学における「文章表現教育」のねらいとする「書くという行為を通して、自分は何に関心があるのかを考え、自分が明らかにしたいことあるいは明らかにしたことは何かとか、自分が伝えたいことや主張したいことは何かなど、『知識を自分に引き寄せて意味づけし直し、学んだこと学んでいることを自分のことばでいかに表現できるか』」（p.4）ということに通じる。

そのために、本実践では「経験を通して自分で学び掴む」「他者との協働」「自分を振り返り、言語化する」の3つを重視している。レポート作成には基本知識の習得も必要である。知識があることでレポートは書きやすくなり、知識は、書き終わった後に自分で文章をモニターする際の観点にもなる。ただ、知ることとできることは違う。書く力をつけるためには、自分で経験して、掴むことが必要不可欠である。さらに、他者との関わり合いの中で多様な見方や考え方を知り、自分を知り、考えを深めていく。そうして獲得したことを自分で振り返り、言葉にしてまとめておくことで確かな学びとして残る。

こうした考えの下、具体的な活動方法はインストラクションデザインの基盤となる5つの「学習の法則」（中村・パイク 2018）など芝浦工業大学教育イノベーション推進センター主催、中村文子講師による「学生主体の授業運営手法 WS」で学んだことを参考に授業設計した。

2. 2 授業の内容と到達目標

筆者が担当する「基礎演習」の授業内容と到達目標は以下の通り定めている¹。

¹ クラス案内の資料にまとめ、初回の授業で学生に説明した。

【授業内容】

- ・ クラスメートと意見交換を行いながら、自分が興味・関心のある社会問題について深く考え、必要な情報を収集し、論理的にまとめて発表する。
→ 考えることを学ぶ
- ・ アカデミック・ライティングのスキルや表現を学び、レポート作成のプロセスを経験しながら、レポートを完成させる。
→ 書き方、書くことを学ぶ
- ・ ペアやグループで相互にコメントし、レポートを推敲する。
→ 文章をきちんと読んで理解すること、文章を良くすることを学ぶ

【到達目標】

- ・ 大学生に必要な「調べる力」「考える力」「他者に伝わるように伝える力」をつける
「答えを検索して調べる」という意味ではありません。まだ答えの出していない問いに対して、情報を収集し、それを分析し、自分なりの答えを出し、それを他者に伝わるように表現する力をつけます。
- ・ 他者とのやりとりを通じ、「協働的に学び合う姿勢」と「自分で文章を良くしていく力」を身につける
一人での学びには限界があります。理解したことを他者に伝えてみたり、他者の意見を聞いたりすることによって、より深く物事を理解することができます。また、どう書けばより伝わるのか、お互いに読み合い検討する練習を重ねることで、自分で自分の文章を客観的に読み直し推敲する力をつけます。
- ・ 人と話し、書くことを通して自分を振り返り、発見する楽しさを経験する
「私はなぜそう感じたのか、なぜこう思うのか」を深め、「本当に言いたかったこと」を発見します。

これらを踏まえ、全 15 回の授業を構成した（表 1）。基本となる内容は『大学生のための表現力トレーニングあしか アイデアをもって社会について考える（レポート・論文編）』（宇野聖子・藤浦五月著）を参考に、その他の内容を取り入れながら構成している。読み手に伝わるレポートの作成には、「内容」、「文章の構成」および「表現・形式」の 3 点を意識することが重要であるという考えから、この 3 点を 15 回の中で学べるように配置した。

「基礎演習」は原則、対面で実施、授業内容に応じて数回オンライン授業を実施するという大学の方針に則り、下表の★マークがついている 3 回をオンデマンド形式で行った。この 3 回は主に文章を読み、書く、またデータベース検索の方法を学び実践するという、各自のペースで取り組める内容であり、オンデマンド形式でも十分学習効果が期待できると考えた²。授業日に Google クラスルーム上に当該内容の説明動画と課題を配信し、期限までに課題に取り組み提出してもらった。

表 1 授業スケジュール（全 15 回）

	授業内容	課題
第 1 回	授業ガイダンス ワーク：学びの秘訣をシェアしよう	今日のワークを基にミニレポート作成
第 2 回 ★	読解・要約の基礎を身につける 読解・要約のポイントを学び、短い文章から長めの文章を要約する練習	『基礎演習ガイドブック』1 章の要約
第 3 回 ★	レポートとは何か 自分のテーマを見つける① 良い文章・悪い文章を比較し、レポートに必要なポイントを整理する レポート作成のプロセスを概観する	テーマ探しの準備「自分を支えた言葉・印象的だった言葉」を 200 字程度にまとめる

² オンデマンドで実施した第 2 回、第 5 回の内容は、2020 年度「基礎演習」オンライン用の共通教材として作成されたものをベースにしている。

第 4 回	自分のテーマを見つける② 興味・関心の見つけ方を学び、その中 の一つであるマインドマップを試す	マインドマップを完成 させる
第 5 回 ★	資料の収集 文献検索の方法を学ぶ 図書館作成の動画を見ながら、データ ベース検索を実践する	文献検索
第 6 回	問いを立てる 5W1Hの考え方をういながら、1つの テーマから多角的に問いを考える練習	資料を集めながら、問い を 10 個考える
第 7 回	レポートの構造を理解する アウトラインを考える 見本のレポートを精読し、構造を知る 自分のテーマでアウトラインを作成	集めた資料と考えを整 理し、アウトラインにま とめる
第 8 回	プレゼンテーション準備① アウトラインのピアレビュー それを基にプレゼンのスライドを作成	アウトラインの修正 プレゼンスライド作成
第 9 回	プレゼンテーション準備② スライド作成の続き 教員と個別に相談できる時間を設ける	プレゼンを 6 分の動画に まとめる
第 10 回	プレゼンテーション<レポートの構想 発表> グループに分かれ、メンバーの動画を 視聴しながらコメントを Google フォ ームに記入。その後、お互いに口頭で もコメントや質問を伝え合う	プレゼンについて自分 の振り返り
第 11 回	引用のしかた・参考文献リストの書き 方を学ぶ 引用と参考文献の方法と意味を理解 し、実際にワークで一つ一つ練習する	序論（300 字程度）と 章立て
第 12 回	レポートで使う表現を学ぶ 話し言葉と書き言葉 表現の違いや意味の変化を学ぶ	レポート第 1 稿 (1500 字以上)
第 13 回	パラグラフ・ライティングを学ぶ 第 1 稿を自分で読み直してみよう パラグラフ・ライティングの説明、ワ ークで練習。その後自分のレポートを 読み直し、問題点を発見、修正する	レポート第 2 稿 (2400 字)
第 14 回	レポートをお互いに読み合い、コメン トする 第 2 稿を 3 人グループでピアレビュー 修正点を一緒に検討する	レポート最終稿 (2400 字以上)
第 15 回	最終稿を読み合う・今学期の振り返り 最終稿をグループで読み合う	

	今学期学んだことを振り返り、グループでシェア→個人で記録	
--	------------------------------	--

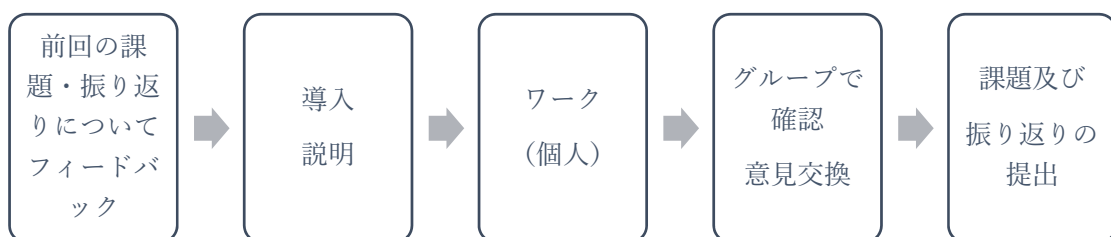
「基礎演習」の共通課題として、2400字以上の期末レポートが課されている。筆者のクラスでは、学生が自分の問題意識がどこにあるのかを探るところから始め、社会問題に関するテーマを自由に選び、1学期を通してレポート作成のプロセスを一つ一つ経験しながら、自身のテーマと向き合ってもらった。テーマ設定に苦勞する学生、答えが出せずに迷う学生は少なくない。しかし長期間自分のテーマに向き合い続け、様々な資料を調べたり他者に意見を聞いたりする中で、物の見方は多様であること、簡単に答えなど出せないこと、そこで自分はどう感じて、それでもどう答えを出すのか、ということが経験できる。また、毎回の授業で学ぶ内容が、自身のレポートについて考え、書いていく作業と連動しているため、レポート作成に必要な知識やスキルを実地的に生かしていくことができる。学期後半（12回以降）では、自分で書いたレポートを素材とし、授業で学んだ観点でそれを修正していくという作りになっている。そして学生同士のピアレビュー、教員からのコメントを踏まえて完成させる。

2. 3 毎回の授業の流れ

授業の資料や課題の配布、提出及び返却は全てLMSの1つであるGoogleクラスルームを利用した。毎回、授業スライド・課題・振り返りをセットにして授業開始前に配信し、授業の中で参照すべきタイミングを指示した。特に授業スライドに関しては、アクリル板などで教室前面のモニターなどが見にくい場合があることを考慮し、手元のデバイスでもスライドを確認できるようにしている。例として、下はGoogleクラスルームの第4回配信の様子である。

第4回 テーマを見つける<マインドマップ>		
	今日の授業スライド	投稿日
	今週のワーク マインドマップを作る	期限
	振り返り	期限

知識を得ることと、自分で体験することで経験的に学ぶことのバランスを意識し、授業全体を通して、また毎回の授業の中でも、「知る」「分析する」「経験する」「学びを振り返る」時間を設けた。その日に学ぶ内容や最低限の知識は授業のはじめに紹介するが、重要なことは実際のワークやグループでの話し合いを通して学生自身で見つけ、課題や振り返りとして自分の言葉でそれをアウトプットしてもらった。そして次の授業の冒頭で教員からフィードバックを行い、学生の理解を強化するような作りである。授業内容に応じてアレンジは加えるが、おおよそ次のような流れである。



ワークでまず一度考えてみることに、そして考えを他者と共有し、答えを確認したり、より良い答えや別の見方を発見すること、そうしたことが経験できるようにした。多くの場合、学生同士話し合う中で答えにたどり着くことができる。なぜそう思ったのか、他にどうということが考えられるのかを学生に問いかけるなど、教員は理解の整理を行うにとどめる。教員自身が説明する際は、なぜこれが必

要なのか、なぜそう考えるのか、そうしたことを学生に伝えるように心がけた。「正しい答え」を早く見つけることより、その過程に何を考え、それをどう言葉にできるかということに重視した。

例えば「表現」に焦点を当てる回でも、書き言葉の表現を覚える、接続詞の機能を知る、ということにとどまらないよう活動を考えた。グループで考えてもらうことで、自分だったらどのような表現を選択するのか、そしてそれはなぜなのかを言語化して他者に説明する必要を生じさせ、そして自分とは異なる他者の解釈も知ることができるようにした。母語話者は言葉についての直感や内省が働くため、普段は深く考えずに表現を選択している。しかし授業の中であらためて「なぜその接続詞なのか」「なぜその表現にしたのか。どういう意味になるのか」ということを吟味し、言葉にしてみると一人一人の解釈の違いが浮き彫りになる。そうすることで、「読み手」としての読み取り方や、「書き手」として何に気をつける必要があるのかということが一連のまとまりとして理解できる。

2. 4 グループワークとピアレビュー

本実践では、対面時にはほぼ毎回の授業でグループワークの時間を取り入れた。これには、日常的に自分の考えを言葉にする機会を設け、少しずつ他者と意見交換をすることに慣れていくため、そして、自分とは異なる見方や指摘に触れる楽しさや意義を感じてもらうためである。特にそれまでの教育場面で他者と直接意見を伝え合う機会が少なく、慣れていない学生にとっては、他者との意見交換に戸惑いもあり、段階的な導入や工夫が必要である。毎回の活動の中で意見を言うこと、言ってもらふことの価値を体験として知っていれば、レポートのピアレビューなど負荷がかかる活動でもお互いに信頼して意見を伝え合うことができる。そうした土壌を初回から少しずつ作ることを意識した。

グループワークを行う際の工夫はいくつかある。まず、グループ分けである。ワークの目的や学生の様子などに応じて様々なやり方

があるが、本実践では普段の授業ワークの際は、できるだけ多くの人と話す機会を創出するため、ランダムに3～4人のグループに分けた。いつも異なるメンバーになることは、若干の緊張感と新鮮さを持たせ、また、より多くの人とのグループワーク時の振る舞いを見て、話し方や考え方を参考にすることができる。そして、グループ内での役割と、グループで行うことの指示を明確にしておくことも重要である。これは昨年度オンライン授業への切り替えの際にその重要性を強く認識したが、もちろん対面でも活かされる。役割にはグループワークを円滑に進めるファシリテーターと、タイムキーパーを置いた。名前順（の2番目等）、じゃんけん、今朝何時に起きたのか等、毎回方法を変えて役割を決めてもらったが、ワークに入る前に口を開きやすくなるよう簡単なアイスブレイク機能も持たせている。

アウトラインやレポートのピアレビューについては、学生のテーマや進み具合によって、予めグループ分けを行う。テーマが近い人を同じグループにするか、あるいは別にするかは状況を見ての判断になるが、テーマが固まりきっていない段階では全く異なるテーマの人同士をグループにし、より広い視野が持てるようにした。ある程度知識や考えが深まった後半には、似たようなテーマの人同士でさらに深い意見交換を行ってもらったこともあった。ペアでは意見の偏りや一人にかかる重圧が大きくなるため、一人に対して二人がコメントできる3人グループが理想である。

レポート第2稿のピアレビュー(第14回)は次の手順で行った。

- 1) 事前に提出してもらった原稿をPDFにしてドライブフォルダに格納、Google クラウドからアクセスできるように準備。グループメンバーのレポートだけでなく、その他の人のレポートも自由に閲覧し、色々な書き方を参考にできるようにした。
- 2) グループメンバーのレポートを読み込み、観点に沿って確認する。過年度では、項目を絞ったルーブリックで評価してもらったこともあったが、評価することに抵抗感を示す学生もいたため、以

下の観点を示し、あくまでも読み手として「読み取れたか」「書かれているか」ということが具体的に確認できるようにした。

【レビューの観点】

①「問い」はどれですか。(該当箇所をハイライト)

「答え」は何ですか。(該当箇所をハイライト)

このレポートで言いたいことは何ですか。(該当箇所をハイライト)

②序論・本論・結論は一貫していますか。

③段落分けは適切ですか。トピックセンテンスはありますか。

④引用と参考文献の書き方は合っていますか

⑤誤字・脱字、ねじれ文はありませんか

トピックセンテンスを意識するというのは、第13回の授業においてレポート第1稿をパラグラフ・ライティングの観点から自分で読み直すという活動で行っており、また、その他の観点で文章を確認、分析する作業もそれまでの授業のワークで行っている。そうした経験を総動員して、クラスメートのために文章を吟味し、改善できる箇所を見つける。

- 3) それぞれが確認した結果を持ち寄り、気づいたことを口頭で伝える。その際、良い点は具体的に伝えること、一読み手としての感想を素直に、客観的に伝えることを強調した。書き間違いも読み間違いも、恐れずに出し合って一緒に確認するように伝えた。
- 4) ピアレビューの振り返りとして、授業終了後、①クラスメートのレポートを読んで気づいたことやクラスメートからのコメントを受けて、自分のレポートをどう修正していきたいか、②ピアレビュー(人にコメントしたり、コメントをもらったり)の経験で気づいたこと、の2点を書いて提出する。これは、様々なコメントをもらって混沌としている頭を整理するとともに、コメントをする/もらう経験をメタ的に捉え直し、その意義を自分の中に定着させる時間にするためである。

2. 5 「振り返り」とフィードバック

毎回の授業後に必ず LMS 上で「振り返り」を提出してもらった。「振り返り」は学生が自分の言葉で学びをまとめる重要な時間であり、教員にとっては学生の理解や疑問を把握してフィードバックするための重要な手掛かりになる。

授業の内容を反芻し、その中で考えたことを自分で言葉にまとめたことが、自分で見つけた答えとして残る。これは、中村・パイク（2018）の 5 つの学習の法則の 1 つ「人は自分が口にしたことは受け入れやすい」、教員などがあれこれ言うことよりも、「参加者自身が考え、自分で発する言葉のほうが、『自分事』となり、研修後の行動に結びつきやすい」（p.46）という考えに基づいている。

「振り返り」には①今日の話や課題を通して学んだこと・気づいたこと、②疑問・質問の 2 点を、短くても構わないが箇条書きではなく文章で書くよう指示し、毎回の課題と共に提出してもらった。「振り返り」から学生が何をどのように理解して、どの部分に疑問があるのかを具体的に把握し、そうしたことを踏まえて、次の授業で質問への回答や、補足説明などを行った。

学生へは、この「振り返り」について、自分のための時間として向き合ってほしいことを学期のはじめ頃に伝えている。ただし、この意味を理解するまでには個人差や時間差がある。そこで、「言葉にすること」でそれを受け取る他者がいることを想像してもらうため、振り返りに書かれていた感想や考え、発見などに対して、積極的に教員自身の言葉で返した。個別にリプライすることもあったが、必ずしも個別ではなくとも、みんなの言葉を「受け取った」ということ、そこから教員自身が考えたことや、今伝えたいことを全体に発信するようにした。そして、互いの「振り返り」にも目を通してみるように促した。こうしたことにより、「他者」の存在を意識しながら、言葉にすることの明らかな意味を認識し、億劫になりがちな「言葉にする」作業に向き合い続けるモチベーションとしてもらうことがねらいであった。

3 学生はどのような学びを得ていたか

3.1 分析の方法

履修学生が授業最終回に一学期間の学びを振り返り自己評価した記録から、学生自身がどのような力をつけたと自覚しているのかを分析する。筆者が担当したクラスのうち1つを取り上げ、分析対象とする。履修者数20名規模のクラスであり、振り返りの研究データとしての利用及び一部掲載について同意確認を行った。

授業最終回に行った「振り返り」の質問項目は以下の通りである。

【質問項目】

◆基礎演習で最も印象的だった/役に立ったことランキング（第3位まで）と、その理由を教えてください。

◆【到達目標①】大学生に必要な「調べる力」「考える力」「他者に伝えるように伝える力」がついたか。（3：ついた 2：まあまあついた 1：あまりつかなかった）

上記の評価をした理由を具体的に書いてください

◆【到達目標②】他者とのやりとりを通じ、「協働的に学び合う姿勢」と「自分で文章を良くしていく力」が身についたか。（3：ついた 2：まあまあついた 1：あまりつかなかった）

上記の評価をした理由を具体的に書いてください

◆【到達目標③】人と話し、書くことを通して、自分を振り返り、発見する楽しさが経験できたか。（3：できた 2：まあまあできた 1：あまりできなかった）

上記の評価をした理由を具体的に書いてください

◆今学期の学び・成長を踏まえて、今後どんなことを実践していきたいと思いますか

◆その他、授業の改善点、ご意見など

この振り返りから、学期を通して身に付いた/向上したと感じている能力に関する記述、以前の自身と比べての変化及びその理由の記述、授業の方法や形態に関する記述を抜き出し、学びや自己の認

識をどのように形成していったのかを探った。

3. 2 調べる力・考える力・他者に伝わるように伝える力

【到達目標①】については、62%の学生が「3（ついた）」、38%の学生が「2（まあまあついた）」と評価した。「2」をつけた学生の理由を見てみると、「調べる力」「考える力」は向上したが、「他者に伝える力」がまだ十分ではないという趣旨の記述が目立った。しかしこうした自己評価も、何度も読み直し書き直すことで文章がわかりやすくなるという経験をし、それまでになかった表現や言葉への視点、意識が生まれたと推察される。

多くの学生にとって、ここまでのレポート作成は全てが初めてのことである。記述を見ると、初めは何も分からなかったところから、一つずつ学び、身につけ、最後には自信となったことがわかる。

- 今まで、何かを調べたり相手に伝えることがあまり得意ではなかったのですが、レポートの作成やプレゼンなどを通して調べる力や相手に考えを伝える力がついたと思います。
- 最初は他の人にどう伝えるかをあまり気にしていない部分が多かったが、友達との意見交換など回数を重ねるごとに、こうしたらより伝わりやすくなるのかとか、友達からの意見を聞いてここはもっとこうしようなど考えたことで、最後には読み手を意識した書き方ができたのではと思う。
- 調べる力、考える力に関しては、当初に比べるとかなり身についたと思います。今までは問題だと思ってもスルーしていたことも、最近は気になった瞬間に少しでも調べてみたり、その調べたことから自分の意見を考える意識ができるようになったのは、自分の中での大きな成長だと思います。

一つのテーマと向き合い続け、深く考える経験への言及も見られ、そうした中で、「考える」とはどうすることなのかを理解したことが窺われる。

- 一つのトピックに関して何日も何時間も考えることができた。途中で自分の意見がわからなくなったりもしたが、より深く考えられたので他の場面でも実践したい。
- 今まで自分が問題意識を持ったものをここまで長い時間をかけて突き詰めてレポートを書いたことがなかったので、とても自分の中で良い経験になった。一つの問題からさまざまな問題が発生し、それぞれに原因があり、結果それをどうすれば良いのか、レポートを通して自分の考えを深めることができたと思う。

3. 3 協働的に学び合う姿勢・自分で文章を良くしていく力

【到達目標②】については、90%の学生が「3」と評価し、「2」と「1」を選択した学生はそれぞれ5%であった。記述を見ると、はじめから他者との協働に意義を感じていたわけではないということがわかる。これまでは誰かと一緒に学ぶということをしてこなかった、経験がなかった、苦手だった、という学生が想定以上に多かった。しかし、グループワークの回数を重ねることで、他者と意見を交換し合うことの意義に徐々に気づくなど、それぞれの中に変化があったようだ。

- 私はあまり自分の意見を相手に述べるのが得意ではなく、正直最初の数回はグループワークが億劫で、意見を捻り出すのも必死でした。ですが、友達から意見をもらうことで私自身レポートをかなり良くすることができ、私も回数を重ねることで、相手に意見を言うことが少しできるようになり、協働的に学び合うと言うのは非常に重要であることがわかりました。(中略) 様々な場面で自分が成長できたと感じるので、とても嬉しいです。
- 今まで人と意見交換をして自分の作業に役立てることが苦手だったし、あまりそれをやる機会がなかったが、今回クラスメートと意見交換を何回か行って、その度に新しい発見をし、自分のレポートに役立てることができた。他者と意見交換をしたりして協働的に学び合うことは大切だと思った。
- 最初はお互いのレポートの改善した方がいいところを言うのには抵抗があ

ったりしたけれど、みんなの一緒にいいレポートを書けるように協力しようと言う気持ちが伝わってきて、自分も意見を言えるようになった。

繰り返し、他者に伝え、他者の言葉を聞く経験を重ねることで少しずつ「他者」の存在がいかに重要であるか、そして自分もまたそうした意味のある「他者」になれるのだということを学んでいる。

- －自分だけの視点では見えてこない感覚や意見を友達からもらうことで、新たな発見が沢山あり、また自分の意見が他の人の助けになっていることが嬉しくも感じました。
- －他者とのやり取りの大切さを改めて感じました。授業を通してお互いを高めあえたので良かったです。

意見をもらうだけでなく自分も貢献できたということを実感し、「お互いを高めあえた」と考えていることがわかる。

「2」や「1」を選択した学生が、そうした意義を十分に理解できなかったのかと言えばそういうわけではない。「ピアレビューを通して、他者が書いた文章を評価したり内容に意見を言うことが苦手だと気付いた。(中略) うまくできなかったので改善していきたい」ということも、経験してみてわかった、次につながる気づきであろう。他者の存在を通して自分の課題に気づいた意味は大きい。

3. 4 自分を振り返り、発見する楽しさ

【到達目標③】については、76%の学生が「3」、10%が「2」、14%が「1」と評価した。

楽しい＝楽、ではない。難しい、大変なことの中や、その先にあるものを見つけた時の喜び、まだ知らぬ自分に出会えることの楽しさをレポート作成でも感じてもらいたいと考えていたが、結果的に多くの学生がそれを体験していたことが窺える。

- －はじめはレポート作成はすごく大変で楽しい要素なんてあるのかな...と思っていました。クラスの間と互いに意見交換したり、アドバイスだけでなく良かった点も見つけてもらうことで、レポートを書き直す時間がただ大変なだけでなく、ここを褒めてもらえたから同じように書いてみよう、と積極的に活動する時間になったと思います。
- －この点に関しては、本当に楽しさを知ることができたので十分に経験できたと言えると思う。レポートを終わらせるということは想像以上に苦しくもあり、それでももう少しここを付け足せば良い文章にできる、などと考えながら行うのは新鮮で楽しかった。元々文章を書くことが嫌いじゃないので、自分の意見と向き合うことの楽しさをさらに実感できて良かった。
- －自分の意見や考えを実際に文章にしてみることで、自分は物事に対してこんなに考えて意見を持つことができるのかと自身に驚いたし、楽しかった
- －進めていくうちに知っているようで知らなかった事実などが多く、新たな発見をするのが楽しくなった。また、自分の考えを文章に起こすことで改めて自分はこういう考えを持っていたのかと知ることができる良い機会だった。

3. 5 学生の中に生じていた学びと変化

「今学期の学び・成長を踏まえて、今後どんなことを実践していきたいと思いますか」という質問への回答には、学生自身による成長の実感と、学びに対する前向きな姿勢を見ることができる。

- －自分で一からレポートを作り上げる力がついたと思う。文章の書き方や、改善する方法も授業を通してたくさん学べた。次レポートを書くときも、一つ一つの作業を飛ばさずに、丁寧に書きたいと思った。レポートの課題を大切に、もっと人を納得させたり興味を持ってもらえるような文章が書けるようになりたい。
- －今までは日常生活で疑問が生じて、特に何もしていなかったため、今回最初にマインドマップを作る際、全く何も思い付きませんでした。ですが、レポートを書いて疑問を解決する楽しさを知り、最近疑問ができた瞬間

にメモをして調べるようにしています。

「レポートの課題を大切にして」、「レポートを書いて疑問を解決する楽しさを知り」といった言葉にも表れているように、自分の成長を実感している学生の声は前向きで、そこには学びに対する主体性がある。課題だから仕方なくやるのではなく、自分にとって意味のあることとして捉えていることがわかる。その他にも、「今自分は何に興味があるのか、どのようなことを考えているかに気づけた」、「身の回りで起きていることへの関心を持つようになり、さらにアンテナを張っていきたいと思うようになった」、「他者の視点、人と協力することを大切にしたい」、「一つのテーマに対して、様々な視点から考えることを意識したい」といった記述があった。これらはレポート作成のみならず、これからの様々な学びに向かう重要な姿勢であり、そうした姿勢が涵養されていたことが窺える。

以上、「振り返り」から見えた学生の学びをまとめると、他者との協働を通して、物事を「考える」ということへの理解を体験的に深め、それを言葉にすることの意義を実感していた。そして、学生自身がその成長を自覚し、「できる」という自信を得ていたことがわかる。では、どのようにしてそのような学びが生み出されていたのか。どのような「仕掛け」が、特にオンラインとの併用でどのように奏功していたのかを次章で考察する。

4. 学びを生み出す「仕掛け」と効果

4. 1 肯定する・される、認め合う経験

先の「振り返り」をひも解くと、思考を深め、言葉にすることのきっかけやモチベーションとなっていたのは、やはり他者の存在だったということがわかる。授業の中でも、早い段階から他者との学びを意識できるような活動を取り入れており、それらが「仕掛け」として働いていたと考えられる。

まず他者との学びを意識する活動として挙げられるのが、初回に行った「学びの秘訣をシェアしよう」である。ラーニング・パターン・カード³の一部を取り上げて共有し、各自で「すでに実践していること」「まだ実践していないこと、取り入れたいこと」に分けて印をつけた後、グループで意見交換をしてもらった。このねらいは、自分の学びのスタイルを振り返り、他者との共通点や、他者の良さ、これまで意識していなかった自分の良さに意識を向けることである。カードを基に話し合うため言葉にしやすかった利点があるだけでなく、互いの良いところに目を向けて肯定し合える場を作ることができる。特に、それまでは一人で勉強することが多かったという学生にとっては、＜学びの共同体をつくる＞＜まねぶことから＞といったラーニング・パターン・カードの言葉が、誰かと学ぶということとの出会いになったようである。実際、多くの学生にとって、他者との学びに対する見方が変化したことは、「振り返り」からも見て取れる。

また、第3、4回で行った「これまでの人生で、自分を支えた言葉、印象的だった言葉」をシェアするという活動も、他者意識を強化するきっかけになったと考える。オンデマンド課題として各自文章にまとめ、それを次の回の授業内でグループでシェアする時間を取った。文章には、個人的な経験や感情が表現されていたため、読み合うのではなく、クラスメイトに話しても構わない範囲でその内容を口頭で伝えてもらった。この活動を通し、まず自分の大事な経験を思い起こし、それを中心に置いたあとで、他者にも目を向け、共感し合える場ができていた。その日の振り返りには、自分に響いた言葉を紹介した時、クラスメイトから共感や関心を示す反応をもらえて、人それぞれの考え方の違いに気づいたり、共通点が発見できたり、そこからまた話を深めることができ、自分の考えがさらに

³ ラーニング・パターンについては、慶應義塾大学 井庭研究室 <https://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp/index.html> を参照のこと。

深まったという記述や、自分だけではなくみんなも同じように疑問を持っているのだと気づいたという感想などを見ることができた。

その活動に続き、第4回後半ではマインドマップを作成して、それをグループでシェアする時間を設けたが、誰かの目に映る世界や様々な考えがあることを楽しく知り、それが視野を広げ、様々なことに関心を持つことにつながっていたようである。その日の「振り返り」から、多くの学生が他者と意見交換する中で、人によって考え方も観点も異なることを楽しみながら発見し、その結果自分の見方が相対化され、客観的に見ることができるようになっていたことが窺えた。紙に書き出すことや話すことで、普段は見えていなかったことを可視化させていく。そのような体験を積み重ねていく中で、普段は見えない、それぞれに様々な経験や考え方を持つ個人であることに触れ、それが尊重されることの意味を感じていたのではないだろうか。

クラスの中で「たくさん意見を交える機会をもらえたのも成長につながった」という声があったように、こうした一つ一つの機会が、物事を多角的に捉え、自分の本当の考えを深く探ろうとする姿勢につながったと考えられる。

4. 2 言葉にすることを積み重ねる

「言葉にする力」を育てていくため、授業では、グループワークで自分の考えを説明する機会を多く設けたり、課題を工夫したり、なぜそう思ったのか問いかけたりするなど様々な「仕掛け」を意識していたが、その中でもっとも重要なのが「振り返り」を書くことであった。「毎回授業の終わりに振り返りを書いて、それを読み返したときに自分はここが成長したな、ここが課題なんだなと自分を振り返りながら、新たな自分を発見することができた」、「毎週の課題や振り返りを通して自分に足りていないところや逆にできたところなどを発見することができた」という記述からも分かるように、毎回自分の言葉で学びをまとめ、そしてそれを読み返すことで、学

びの過程が積み重なり、誰よりも自分が成長を実感できる。

学生の言葉を受け止め、返すという教員のフィードバックをいかに行っていくかということも大切な「仕掛け」である。たとえば筆者が LMS 上のリプライや授業の中での全体へのフィードバックで繰り返し伝えたことは、「自分で見つけた答えは必ず自分の中に残る」ということであり、「疑問を持つこと」、「素直に言葉にしてみたこと」、「他者とのやりとりから自分を振り返ってみたこと」への肯定である。これらは学生の素直な言葉に触れ、試行錯誤しながら学びに向き合う姿を見て、伝えたいと思ったことであり、このように教員自身が感じたことを素直に言葉にして返した。また、「わからない」状況にある不安感などの吐露についても、それこそが重要であり、つまりそれは前進している過程にあるのだということをお伝え、その歩みを見ているということを示すようにした。さらに、疑問や質問を積極的に授業に取り入れたことも、自分が言葉にして伝えたことは、意味があったのだと実感することにつながったのではないだろうか。そうしたことの積み重ねで、些細なことであっても、考えたことやわからないことは言葉にして伝えてみよう、伝えても良いのだ、と思う後押しになったと考える。

4. 3 対面とオンライン併用の効果

思考を深め言葉にする力を育てていくためのこうした「仕掛け」に、LMS の活用、そして対面とオンデマンド授業の併用といった形はどのような効果をあげていたのだろうか。

まず、LMS の活用による利点は数多くある。資料の配布や課題の提出管理が容易になるだけでなく、学生が理解したことや疑問点の把握とその記録が容易になり、従来に比べてフィードバックが充実し、より踏み込んだ補足説明ができるようになった。さらにアウトラインやレポートなどをクラス単位で共有することも容易になり、学生が、より多くの文章に触れて、どのような書き方や表現だと読みやすいのかなどを参考にし、掴むことにつながっていた。

特に「振り返り」を LMS 上で行った効果は大きい。1 つ目に、紙よりも管理しやすく、また過去回の自分の記述や教員のリプライもいつでも確認できるため、教員が意図する授業内容の連続性が学生にも伝わりやすくなった。筆者は「振り返り」へのリプライとして、「言葉にすること」「自分で何か発見して掴むこと」を繰り返し肯定した。もちろん授業の中で口頭でも伝えたが、コメント欄に残ることでその後も目にする機会があったはずである。2 つ目に、LMS 上では全員の「振り返り」が読み合えるため、「振り返りの集合体＝学びの総体」としての力が発揮される。他科目の課題も多い中、毎回、全員が全力で「振り返り」を書いていたわけではないだろう。最低限で短くまとめる回も、長く書く回もある。一つを見れば短いものがあったとしても、20 名分集まった時、多くの内容がカバーされ、多くの学びが浮かび上がる。「他のクラスメイトの振り返りも読むことができたのが良いなと思いました」という声もあり、他者の「振り返り」を読むことで、教員の説明とはまた違う言葉やまとめ方で授業内容をさらに理解したり、考えたりすることにつながったのではないかと考えられる。

これらは工夫すれば従来のように紙でもできなくはないだろう。しかし、教員も学生も労力をかけずに共有でき、いつでも参照できる形で残せるというのは非常に大きい。ただ一点留意すべきこととしては、LMS を使用することにより提出時間などが見え過ぎることによって管理意識が厳しくなってしまう可能性があるということだ。LMS は教員と学生自らの「学習を管理するもの」であるべきで、「学生管理」の側面が強くなってはいけない。

次に、対面とオンデマンド授業の併用について考えてみたい。他者の存在を強く認識するには、やはり物理的に他者を感じられる場が大きく作用する。オンラインでも工夫次第で不可能ではないが、昨年度の完全オンラインの形で実施した結果と比較しても、グループワークで他者と学び合う点については対面授業に強みがある。「振り返り」でも、対面でみんなと話し合える場が多かったのがと

でも良かったという声も少なくなかった。しかし、オンデマンド授業を取り入れたことの効果も実感した。それは、自分のペースで、納得が行くまで課題と向き合い、考える時間と場所が確保されるということである。オンデマンド授業で課題にじっくり向き合うことで、対面時の活動の質も高めることができると感じた。

その効果を特に実感したのが、要約をテーマにした回のオンデマンド授業である。その中で『基礎演習ガイドブック』の第1章を読み、「基礎演習」の目的をまとめるという課題を課したが、これを通して、授業の目的が一人一人にしっかり伝わり、この授業で行っていることの意味の理解度が上がったと感じた。学生が、ここで学ぶことは自分のために意味のあること、今、そして将来の役に立つこととして「基礎演習」を位置づけて取り組むようになった。要約することで文意の理解が深まるのは当然ではあるが、そうしたところまで読み込み、向き合うためには授業中に時間を設けて書くというのでは十分な時間を確保できない。宿題としてはモチベーションの維持が難しい。それぞれの集中できる時間、場所で行うことができるオンデマンド授業だからこそその成果ではないかと考える。

他にも、レポートのテーマ探しの準備として個人で振り返って文章を書くといった内容や、図書館の情報検索という、完成や習得までに学生間で時間差が生じる活動はオンデマンド授業で行うのに最適であったと言える。学生のオンデマンド授業に対する意見でも「各自の文章を書く時間だったらオンラインかオンデマンドだと助かる」「オンデマンドの授業は忙しい大学生にとって嬉しいものだった」「オンデマンドと対面を分ける方法がとてもやりやすかった」など好意的なものが見られた。

課題や授業内容に合わせてオンデマンド形式を組み合わせることにより、課題の定着度や深まり方が変わる。まずは個人で落ち着いて考え、深めておけたことで、対面授業で他者と意見交換をする際の内容の質が高まる。自分で十分に向き合えたからこそ、言葉が出てくる。オンデマンド授業では対面時以上に指示や課題をわかり

やすく準備する必要があるが、それができれば、授業内容に応じて対面とオンデマンド授業をうまく組み合わせることで、大きな学習効果が得られるという手応えが得られた。

おわりに

このように、他者の存在を強く意識しながら、レポートを作成する一連の活動の中で、学生の思考と言語化する力は育まれていた。ここで重要なことは、学生が自身の成長を実感し、「できる」という自信を得ていたことである。そこにはグループワークで他者と意見交換をするということや「振り返り」などで言葉にすることを徐々に実践していける「仕掛け」があり、対面授業の強みを生かしながらオンデマンド授業を併用し、LMSによって学びを積み重ねていくという形が奏功していたと言える。この結果は、今後の新しい授業の形を考える上でも大いに手掛かりにできるだろう。

ただ、あらゆる教育実践に共通して言えるように、学生は日々様々な場所で様々な経験をしており、この教育実践だけで完結しているわけではない。新型コロナウイルスが顕在化させた様々な社会問題に対して、学生がより敏感になっているということもあるだろう。「考える」ということを深められた背景には、そうしたことも影響している可能性がある。

最後に、下の学生の語りからあらためて考える。

ーレポートを完成させるまで、もっといいものを作ろう、もっと調べてみよう、と、何度も調べ、考え、ということを繰り返したので、この力をつけることができたと思う。一度調べただけで満足せず、この問題はどうしたら解決への一歩を踏み出せるだろうと、何度も考え、自分はこれが言いたいけど、どうしたら相手にわかりやすく伝えることができるだろう悩んだ。

「もっといいものを作ろう、もっと調べてみよう」。結局は、学生がそう思えるような働きかけが授業でできるかどうかというこ

とではないか。そのために、「仕掛け」という種を撒くのである。どれが、どの学生に、いつ響くかはわからない。しかしだからこそ、できるだけたくさん散りばめておく。

特に「基礎演習」は、大学でのこれからの学びに向かう姿勢を作る場所である。一人一人が既に問題意識を持っているということ、学びは楽しいものであるということ、他者との出会いや協働が世界を広げること、大学の学びに必要な力がついたら実感できること、そうしたことを学生に伝えられる教育実践を考えていきたい。

参考文献

井下千以子（2008）『大学における書く力考える力ー認知心理学の知見をもとに』東信堂。

中村文子、ボブ・パイク（2018）『研修デザインハンドブック』日本能率協会マネジメントセンター。

教材・資料

宇野聖子、藤浦五月（2016）『大学生のための表現力トレーニングあしか アイデアをもって社会について考える（レポート・論文編）』、ココ出版。

神田外語大学（2019）『基礎演習ガイドブック（第9版）』。

「ラーニング・パターン・カード」

コンテンツ制作：慶応義塾大学 SFC 井庭崇研究室

カード制作・販売：株式会社クリエイティブシフト

<https://creativeshift.co.jp/product/2391/>

謝辞

この教育実践は、一つ一つの活動に真摯に向き合い、そこで受け取ったことを丁寧に言葉にして返してくれた学生の皆さんなくしては実現しませんでした。一緒に授業を作り上げてくれたことに、心から感謝します。